

## 学部からのご挨拶と講演者のご紹介

森田 彦

こんにちは。社会情報学部長の森田です。今日は年末のお忙しい中、このシンポジウムにお越しいただきまして誠にありがとうございます。私どもの社会情報学部が1991年4月1日に開設されて以来、今年で20周年を迎えることが出来ました。その20周年記念シンポジウムを札幌学院大学の総合研究所のシンポジウムとしてこのように開催出来たことを大変嬉しく思っております。

このシンポジウムの企画を私どもが考え始めた頃に、3月11日の東北地方太平洋沖大地震が発生いたしました。地震もさることながら、その後の津波の被害、それからそれに伴う東京電力福島第一原発の事故の傷跡は深いものがあって、いまだに復興の兆しが見えないという状況であります。この震災では、学長のお話にもありましたが、特に原発の報道について、新聞やテレビの既存のマスメディアの情報に多くの人が納得できず、さらには疑念を抱き、インターネットで流通する情報がそれを補完する、ないしは覆すというような状況が発生いたしました。こういった災害情報も社会情報の大事な一つなのですが、これは社会情報の流通あるいは共有のあり方が厳しい形で問題提起されたものではないかと、私どもは捉えた次第です。

そこで、社会情報が今後どのように流通、浸透、共有することになるのか、それを社会情報学部、あるいは社会情報学20年の蓄積をもって、この震災で露呈した社会情報にかかわる問題を考え、乗り越えたいということから、「震災を乗り越える社会情報学」というテーマを設定するに至った次第です。非常に大きなテーマなのですが、それを議論するに際して一線で活躍されている4名の方を、今回お招きすることが出来ました。私どもは非常に嬉しく思っております。そこで私の方からそれぞれの方がお話する簡単な概要を紹介して、挨拶に代えさせていただきます。

まず、早稲田大学教授の伊藤守先生です。社会情報学会長でもあります伊藤先生からは「メディア環境の変動とメディアリテラシー」という内容でお話いただきます。伊藤先生はここ何年かの間に、従来の既存のマスメディアの情報を受け取って、それを共有しながら考え、みんなが行動するという社会から、インターネット上のTwitter、フェイスブック、ブログ、それからユーストリームなど、そういうソーシャルメディアと一般に言われるメディアを媒体とした情報を、一人一人が選択して、自らの情報を発信するという、そういう社会に変わりつつある、そのことが今回の震災で一気に顕在化した、あるいはそういった傾向が決定的になったという問題提起をされています。そこで、メディアコミュニケーション論の専門家の立場から、こういった社会情報の流通・浸透・発信の仕方の革新的・革命的な変化がどのような経緯で起こって来たのか、それから今後社会にどのような影響を与えるのかというあたりをお話いただける

ものと思います。伊藤先生のお話は今回のこのテーマ全体を俯瞰するイントロダクション的なお話になると思います。

続いてお話いただく岩上山身さんですが、フリージャーナリストで、それからインディペンデントウェブジャーナル代表ということで活躍されておられます。岩上さんは今申しましたメディアの変動の渦中で活躍されていると言いますか、むしろそういった変動をけん引されている中心人物の一人です。震災に関してはその直後から東電とか保安院の記者会見の模様を、ユーストリームを通じて配信し続けるという活動をされました。これによって、多くの国民はマスメディアが報道しない現場を目にすることができ、状況を理解することが出来ました。大変革的な活動だと思います。岩上さんからは既存のマスメディアを補完する、あるいは対抗するメディアの活動を通じて、その社会に与える影響を、まさに最前線の現場からの生の声としてお話いただけるものと期待しています。

このように既存の大手マスメディアの情報を共有しながら一様に行動するという社会から、個々が情報を選択して考え発信するという社会になってくると、ますます社会の合意と言いますか、意思決定が難しくなってくるようにみえます。震災に関してみても、放射線汚染の安全基準の問題だとか、避難区域をどこまで設定するか、そういう合意形成が難しい問題がたくさんあらわれてきました。すると、今後そういった大きな社会合意というものを形成するのが難しくなるというか、出来なくなるのではないかとということが危惧されるのですが、明るい光明もあります。それは、ある条件が成り立つと、個々の構成員の意見が集約されて、より一段高いレベルの全体の意思決定、合意形成が出来るという、いわゆる集合知という概念であります。実はネット上ではそういうことの実例がありまして、典型的な例としては、不特定多数の人が事典を共同で作成するというウィキペディア等が挙げられます。3番目にお話いただく青山学院大学教授の増永良文先生は、この集合知を実現する情報テクノロジーとして、「ソーシャル・コンピューティング」を掲げています。そして実際に、集合知による合意形成や概念形成を実現するシステムの構築と具体的な応用に取り組んでおられます。そこで、増永先生のお話からは、震災という話題から少し離れて、困難になった社会の合意形成にソーシャル・コンピューティングはどのように応えることが出来るのかということ、情報テクノロジーの立場から、今取り組んでおられるシステムの実例を通じてお話をいただけるものと思います。

最後に東北大学の正村俊之先生からは、今回の震災、特に原発事故に関するリスクの認知及びリスク管理の分析についてお話いただきます。リスク認知というのは、どういうものがリスクかということで、リスクの管理というのはリスクを避けるためにどのようなことをやればいいのかということで、大まかに言うとそういうことなのですが、正村先生のコミュニケーション論の立場からの分析では、そのようなリスク認知・リスク管理というものは、社会あるいは文化によって違うということです。ですから今回の原発事故におけるそれも、日本社会の特性が色濃く反映されている。そういった分析を通じて、今後この震災を教訓に、リスクの認知・管理をどのようにしていけば良いか、そういった指針のようなものを先生のお話からはいただけるのではないかと期待しております。なお、正村先生は東北大学ですから仙台在住で、ご自身も今回の地震の被害に遭われました。そういった生の経験を基に、リスク認知・リスク管理というようなことに、より強い問題意識を持って、たまたま我々がご声かけをしたシンポジウムに合わせて、今回の話をご準備下さったと伺っております。

こういった多彩な4名の方々のお話を踏まえて、少し休みを挟んで第2部のパネルディス

カッションで、改めて震災で露呈した社会情報の問題をどのように克服出来るのか。それを考えたいと思います。ただこれは、パネラーの方々だけではなく、是非今ここにお集まりの皆さんと一緒に考えたいと思います。そして願わくは、今日ここに集まった皆さんの集合知が発揮されるということを期待しております。それでは、今日は長丁場になりますけれどもどうぞよろしく願います。ありがとうございました。